

# JAELE Newsletter

## 上越英語教育学会通信

*The Joetsu Association of English Language Education*

July 1, 2019

No. 21

### T、T、トビー

柏崎市立比角小学校  
教諭 矢嶋隆之  
(平成 23 年度 修了生)

上越教育大学の大学院にお世話になっていたころ、Toby という名前を使っていました。今ならば、きっと名前だけで小学生が興味をもってくれそうです。

現場に戻ってから 7 年が経ちました。とうとう自分の学級をもたない級外となってしまいました。新採用の職員の学級のサポートに回ったり、いろいろな学年の授業に出たりと、昨年までとは全く違ったスタイルでの仕事に追われています。

最近、外国語について思うことがあります。それは、「これを学ぶとどんなことができるようになるのか」ということを子どもたちが知り、それに魅力を感じ、「やってみたい」「できるようになりたい」と思えるような授業(単元)にしたいということです。いわゆるバックワードデザインについてです。ただ単元のゴールを示したからといって子どもたちが意欲的になるとは限りません。ゴールやその示し方、ゴールまでの見通しがとても重要になります。

昨年度、こんな実践をしてみました。“When is your birthday?” という単元をアレンジしたものです。単元の導入で“When”を使えるようになると、どんなことができるようになると思う?と子どもたちに問いかけます。まず、子どもたちからは次のような反応が返ってきます。「先生、それってなんて読むの?」「それって、どういう意味?」という具合です。その後、「日本語で言う『いつ?』という意味かな」と伝えると、子どもたちから続いて「いつ遊べる?」「いつがいい?」とか「相手の予定が聞ける!」「予定が聞けるということは、約束ができる!」などの返答が返ってきます。こんなやりとりをした後に、「実はね、“When”を使えるようになると友達のことをもっと知ることもできるんだよ」と話します。そして、単元のゴールを伝えます。“When is your birthday?”を使って誕生日を聞き合えるようになるのではなくて、“When is your special

day?”を使って、友達のことをもっと知るというゴールです。多くの先生方が様々な実践されていると思いますが、私はこんなことを特に大切に授業を構成しています。

もう一つ私が大切にしていることは、大学院時代に学んだ「日本語でしても楽しく、やりがいのある活動を！」ということです。外国語というフィルターをかけると、いろんな活動が何となくできてしまうことがあります。しかし、自分の実践を見つめ直す必要があると思います。「日本語でしても楽しく、やりがいがある活動を！」これに当てはめると「何でこんなことしているのだろう？」「楽しいけれど、これが何の役に立つの？」そんな疑問が湧いてくるのが意外とあるものです。

大学院時代は、小学校外国語についての研究と子育てに全力を注ごうと決意し、臨んだ2年間でした。二人の娘も小学生になり時間の流れの速さを感じています。「矢嶋先生の専門は何ですか？」とよく聞かれることがあります。昔は、「専門と言えるようなものが無いんですよね。」と言っていた私が、今では「ちょっとだけ外国語です。」と言えるようになりました。まだまだ未熟な私ですが、実践したり、その実践についてみなさんにご意見をいただいたりしながら「専門は、外国語です。」といつか胸をはって言えるようになりたいと思っている今日このごろです。

来年度からは、5・6年生は外国語の教科書を使うことになります。どんな教科書を使って勉強することになるのか少しドキドキしますが、楽しみでもあります。皆さん、またいろいろと教えてください。一緒に頑張りましょう！



# これからの英語教育と大学院で学びたいこと

大学院1年 学校教育深化（文理深化英語）コース

下山田 智香子

近年のグローバル社会に伴い、国際共通語である英語がますます重要視されており、日本でも2020年に開催される東京オリンピック、パラリンピックに向けて英語への意欲・関心が高まっています。このような社会的背景に対応するために、文部科学省は、英語教育にかかわる様々な取り組みを提示してきました。2012年の中央教育審議会の答申で「アクティブラーニング」という言葉が登場し、現在に至るまで英語教育を中心に教育の分野で大変注目されてきています。また、新学習指導要領には、「アクティブラーニング」という言葉が「主体的・対話的で深い学び」という言葉に代わり、学習者が能動的に授業に参加するだけでなく、学習者同士の関わり合いの中で学びを深めるという姿が目指されています。このような背景から、今後、授業内で生徒同士がコミュニケーションを行う活動が増えていくことが予想されます。このような変化にきちんと対応できるような教師になるために上越教育大学の大学院への進学を決意致しました。

大学院では、内容中心型の英語の授業について研究したいと考えています。私が内容中心型の授業に興味を持ったきっかけは、短期留学をした時です。相手の言っていることを理解することが出来ても、その話題に対して考えたことがなかったり、自分の考えを持っていなかったり、歴史や文化の知識が足りなく話を膨らますことが出来なかったりなど、歯がゆい思いを経験しました。そこで、今まで学問的に捉えていた英語は、コミュニケーションツールという側面も持っているということを実感しました。もちろん学問的に文法を学ぶことはとても重要です。しかし、その知識を使って何を話すのか、何をするのかというツールとしての英語を身に着けることも大切だと感じました。

また、学部時代の経験も内容中心型の授業に興味を持つきっかけになりました。学部時代は、言語学を専攻しながら宗教や女性学など様々な学問を体系的に学び、学問の繋がりを知ることの楽しさを知ることが出来ました。そこで学問の繋がりを知る楽しさを感じる事が出来る授業をしたいと思うようになりました。例えば、教科書に女性の権利に関する内容のリーディング教材があれば、ただ英文を読むだけではなく、女性権の歴史や映画や文学作品で扱われている女性を取り上げ、英語を使って教科書の内容を深める授業をするというものです。この活動を通して、生徒は英語を使って自分の意見を持つことができ、歴史や文学などの知識を広げることも可能になります。しかし、中学校や高校においてこのような授業をするには、授業時間や受験への問題、生徒一人一人の英語のレベルの違いなど、課題もたくさんあります。課題への解決策を考えるとともに、どのような授業を行えば使える英語の獲得に繋がるのかを学びたいです。

大学院2年間では、英語を使って様々な学問を多角的に捉える力を育成することの出来る教師を目指したいと考えています。そのために、自らの英語力の向上に尽力し、日頃から広い視野を持ち、共に学び合うレベルの高い仲間や大学院への進学を応援してくれている両親への感謝の気持ち忘れずに、充実した大学院生活を送りたいと思います。

# 上越教育大学での院生生活

大学院 1 年 学校教育深化（文理深化英語）コース

宮崎 新

上越教育大学大学院に入学して早三か月が経とうとしている。上越出身、さらに上教大附属中学校出身ということもあり、上教大は昔から馴染みがある大学であった。中学生の頃は、教育実習の期間になれば上教大生たちの実習の授業を受け、夏休みの「わくわく大学ウィーク」に参加してキャンパスに行ったこともある。高校三年時の進路選択の際、上教大も志望大学の一つであったが、センター試験で思うように点数が伸びず、断念せざるを得なかった。今こうして上教大の大学院生になり、研究や教員になるための勉強ができていることは、昔からの夢が叶ったようで大変嬉しい。

私が大学院に入学したのは、中学もしくは高校の英語科教員になるために必要な資質を身に付けたいと思ったからだ。そう思ったきっかけは学部生の四年生だった頃に遡る。私は京都外国語大学で教職課程を履修し、中学・高校の英語科教員の教員免許を取得した。しかし、当時の自分は教育実習での実力不足を痛感したことや、教員という職業は自分が思うよりはるかに多忙で過酷な仕事だと知ったことで、教員になることに迷いが出てしまった。そして最終的に新潟県内の民間企業に就職する道を選んだ。しかし、社会人としての経験を積む中で、自分の将来を見つめ直したところ、やはり自分が真に就きたい職業は教員であると思えるようになった。去年、仕事の合間を縫って上教大の大学院入学試験を受け、なんとか合格し、今年の春無事入学することができた。

現在は大学院の英語教育に関する様々な授業を履修している。外国語教育の指導法の歴史的な変遷を通して現在の指導法を考えたり、生成文法の観点からヒトが言語獲得していく過程を学んだり、どれも非常に興味深く、また将来教員になるために必要だと思える内容である。また、学部生の頃から専攻していた言語学のゼミに入った。修士論文のテーマはまだ明確には決まっていないが、英単語の接辞や語源を調べることで、その中核となる意味（コアミーニング）を中心に研究したいと考えている。

これからの院生生活は、授業の課題をしたり自身の研究テーマの研究をしたりするのはもちろんであるが、同級生や先輩、後輩等の周囲の人々との関わりも大切にしていきたいと考えている。学部生時代、私は自分の部屋に閉じこもりがちであったため、周りの人々との関わりが薄かった。人との関わりは教員になってからも求められるスキルである。学部生時代の反省を生かし、他者と関わり合いながら大学院での学びを深めていきたい。

最後に、わずか二年で会社を辞め、大学院に行きたいという意志を快諾してくれた両親に感謝しつつ、実りある院生生活を送りたい。

# これからの英語教育と大学院で学びたいこと

大学院 1 年 学校教育深化（文理深化英語）コース

森本雄貴

スマートフォン等の普及により、グローバル化に更なる拍車がかかる現代において、国際共通語の一つである「英語を使える」ことの重要性は益々高まっている。このような社会的背景を鑑み、学習指導要領も大きく改定された。新学習指導要領の大きな改正ポイントとして、英語の早期化が挙げられる。東京オリンピックが開催される 2020 年から小学校 3 年生からの英語必修化が本導入され、児童・生徒の更なる英語力向上が期待される。また、アクティブラーニングの内容を色濃く受けた「主体的・対話的で深い学び」という文言が盛り込まれた事も学習指導要領改定の大きなポイントである。従来の教師の話を受けて学ぶ授業体系から、新しく生徒自身が教師や仲間との対話を通して学んでいくスタイルへの移行が望まれている。

このような背景を踏まえ、教師に求められる能力も変わってきているように思います。従来の生徒に分かりやすく説明する能力に加えて、生徒同士のコミュニケーションを円滑に進めさせる能力や生徒が主体的に活動を行うことが出来るように調整する能力の必要性が強調されています。私は、上記のような力を持ち、変化し続ける現代社会に対応した教育を行える教師になるために、上越教育大学に進学する事に決めました。

私の現在予定している修士論文のテーマは、「動機付けの観点から見たラウンド・システムを用いた英語教育の運用」です。ラウンド・システムとは、教科書を 1 年間に何度も繰り返し使うことによって、英語の定着を図ろうとする学習メソッドです。有名なエビングハウスの忘却曲線からも分かるように、人間は繰り返し学ぶ事により記憶の定着を安定させることができます。反対に、繰り返し学ぶ場がない場合、一度覚えた知識も段々と記憶から消えていってしまいます。このような事態を防ぐための方法であるラウンド・システムは、英語教育の 1 つのメソッドとして大変有効であると感じているため、このメソッドを実際の学校現場でどのように運用すべきか、という事を研究したいと考えています。ただし、1 つの教科書を 1 年の間に繰り返し学習するという事は、新しい学びが少ないという面において、児童・生徒のストレスになる可能性も否めないのは事実であると思います。そのため、動機付けの観点から反復学習や振り返り学習が及ぼす影響を調査し、動機付けを高める有効なストラテジーをラウンド・システムに盛り込む事により成立させたいと考えています。

現場経験のない私において、上越教育大学には沢山の素晴らしい現職教諭の方々がいるというのも大きな魅力です。この素晴らしい環境で多くのことを学び、2 年後には大学院で得たたくさん知識を教壇の上で披露できるようになりたいと思います。また、そうなれるように 1 日 1 日を大切に、大学院生活を送っていきたいと思います。

## 研究室の窓から



清泉女学院短期大学部長  
教授 中村洋一  
(平成4年度修了生)

### 連載第9回

### 変わりゆく...

平成が終わり、令和の時代を迎えた。私は、上皇陛下と上皇后陛下が軽井沢で出会われた年に生まれ、映画の『ALWAYS 三丁目の夕陽』に描かれた昭和、テレビからコマーシャルがすべて消えた昭和天皇崩御と平成への代替わり、202年ぶりの生前退位による皇位継承で令和の始まりを経験した。その間、20年の高校教員、9年の大学教員、今の短大にお世話になって10年、英語の教員歴が40年に達しようとしている。そして、北斗の拳の台詞みたいだが、私はもうすでに2度退職していて、まあ要するに、変わりゆく時代を生きながら、第3の人生を過ごしているわけである。

国際度量衡総会 (CGPM: Conférence Générale des Poids et Mesures) の審議により、2019年5月20日から、質量の「キログラム(kg)」、物質量の「モル(mol)」、熱力学温度の「ケルビン(K)」、電流の「アンペア(A)」の4つの定義が改定されたと聞いた。

キログラムは「国際キログラム原器の質量を1kg」として規定されていたが、光子のもつエネルギーと振動数の比例関係をあらわす比例定数であるプランク定数(h)を「 $6.62607015 \times 10^{-34}$ Js」として定め、この値をもとに定義される、のだそうだ (<https://pc.watch.impress.co.jp/docs/news/1154054.html>)。最初は水1リットルの重さから始まり、1889年に改定されて、「直径・高さともに約39mmの円柱形の、プラチナ(白金)90%、イリジウム10%からなる合金製の金属塊」の定義によって作成された国際キログラム原器が、約130年間使用されてきたが、いよいよ引退となった。人工物による質量の定義には汚れやサビなどの経年変化、焼損や紛失といった懸念も指摘されていた (<https://ja.wikipedia.org/wiki/>)。「 $6.62607015 \times 10^{-34}$ Js」です、と言われても、正直、良く分からないが、1キログラムの重さそのものが変わるわけではなく、より正確で不変的な数値としての定義になったのだろう。変わるべきではないものを変えない定義で表そうと、検討を深めてきた人間の叡智に感心すると同時に、130年間、大役を担ってくれた国際キログラム原器に「ありがとう」と言いたい気持ちもある。そして、これからは、どこかの博物館

の片隅で、変わりゆく時代のシンボルとして、ひっそりと語り続けて欲しいと思う。

Amano (2000) によると、明治になってから始まった日本の大学入試のお手本は、中国の *Keju* がヨーロッパに渡り、その影響で発達したフランスの *grandes ecoles* を模したものである (p. 33)。この論文は、1999年に、アジアで初めて開催された Language Testing Research Colloquium: LTRC 99 の Plenary Speech が基になっている。私は、LTRC 99 実行委員会の事務局長をしていたので、天野先生に基調講演をお願いしてご快諾いただき、相対的にはそれほど長い歴史を持っているわけではないが、日本の近代化と、教育を取り巻く環境の変遷の中で、入学試験のシステムがどのように対応してきたのかを俯瞰することができる貴重なご講演をいただき、世界各国から参加していた言語テストの研究者たちに広く発信できたことを誇らしく覚えている。

150年ほどの歴史の中で、日本の大学入試システムはいくつかの変遷を経てきたが、また今、大きく変わろうとしている。新しい大学共通テストは、「教科横断的」、「対話的・主体的で深い学び」、「基礎的読解力」、「コンピュータを利用した試験方式(CBT)」といったキーワードを掲げて、新しいシステムの開始に向けて検討が進められているようだ。英語は、特に大きな変化が起きる科目である。

「各大学における入学者選抜」の時代を経て、私が高校の教員になる前の年の昭和54年に「共通一次学力試験」が始まり、昭和64年(=平成元年)まで続いた。「進学校」ではなく「受験校」と揶揄された新任校で、共通一次対策の補習授業なんかもよくやった。平成2年からは「大学入試センター試験」が始まったが、センター試験を受験する生徒がいなかった夜間定時制高校に勤務しており、高校の教員としては、あまり関わりはなかった。平成18年のリスニング・テスト導入の時は、大学の教員として、初めての実施にとっても緊張した。幸いなことに、今まで、機器の不良とか、再開テストの経験はなく、センター試験のリスニング・テストに関わるのは、2020年1月の、あと1回のみとなった。2021年1月から始まる大学共通テストの英語では、全体の点数に占める配点が1/5から1/2に増える形でリスニング・テストも実施されるようだ。英語は、そのリスニングとリーディングのテストとなり、従来から妥当性の課題が指摘されていた発音・アクセントの問題は出題されなくなる。そして、併行して「民間の資格・検定試験」の活用が始まり、2024年1月が、大学共通テストの英語および、リスニング・テスト実施の最後の年になる予定だそう。

「民間の資格・検定試験」の活用には、ご承知のように、課題が多々指摘されている。学校教育における英語教育との関連性はどうか? 異なるテストの結果をどのように比較するのか、その統計的手法は信頼に足るものなのか? パフォーマンスのテストの実施と採点が困難であることがこの問題のモトにあって、「外部」へ丸投げした感も強い。しかし、内部でも外部でも、いずれにしても実施と採点の課題はクリアしなければならない。その方法論は確立しているのか? 費用や実施場所による公平な受験機会の確保は困難なのではないか? 外部テスト実施団体のいくつかは、問題集や参考書、対策本を発行しているので、利益が相反する状態になるとも言えるのだが、倫理上の問題はクリアできるのか? その問題集なんかが、「第二の教科書」になってしまうのではないか? このような、いくつもの? が未解決のままでもいいのだろうか????? しかし、スケジュール通りに進めば、大学受験に関わる英語のテストは、必ず変わりゆくのだろう。



自分自身の大学受験の時は「各大学における入学者選抜」の時代で、国立大学は一期校と二期校に別れていて、国立大学の受験機会が二回あった。一期校の外国語大学と二期校だった地元の大学の人文学部を受験希望にしていたが、最初に受けた私立の大学から合格通知をもらい、当時、日本一学費が安かったその私立の大学に進学した。

あまり熱心に受験勉強はしなかったけれど、文系志望で、国語・古文・漢文、日本史、数Ⅰ・数ⅡB、生物、英語の問題集をいくつか買って、がむしゃらに問題を繰り返し解いたのは覚えている。古文と漢文は、教科書の文を原稿用紙に書き写し、その横に、現代語訳と解説を、友達から借りた教科書の虎の巻から書き写すという作業をひたすら続けたのが、自分としては効果があったと思っている。日本史は、『赤本』の傾向と対策に、合格した私大の過去問から判断すると弥生時代と明治維新から中心的に出題されると書いてあったので、そこに山をかけて、見事当たった。数学で自信があったのは因数分解と二次関数だけだった。学習要領改訂の前倒しで別冊の薄い教科書が追加された集合と確率はなにがなんだかさっぱりだった。確率なんかはその時にしっかり勉強しておけば、大学院に入って勉強を始めた項目応答理論の理解に少しは役立ったのになあ、と後悔もしている。理科では、できるだけ数式のない生物を選んだが、光合成のエネルギー計算で、物質量のモルなんかが出てきたら、お手上げだった。

英語の受験勉強で人気があったのは、『赤尾の豆単』とか『出る単』だったけれど、自分にはあんまり興味がなく、英文法参考書の「重箱仮定法」のような例外の解説をよく読んでいた。Newsweek を定期購読して、主にカッコをつけるために、外から見えるように持ち歩き、読むことを装うために、赤えんぴつで下線を引っ張ったりしていた。そのうちに、少し読めるようになったら面白くなって、英文雑誌や英字新聞の記事を読むこともけっこうやった。英字新聞は他にも役立っていて、いつものアルマイトの弁当箱でも、英語の文字がいっぱいの新聞紙で包めばハイカラに見えて、少なくとも外見は1ランク上だった。ご飯のいっぱい入った四角い弁当を食べながら、お醤油がしみて黄色くなった新聞紙に書かれていた、ベトナム戦争反対の学生デモを伝える記事なんかを読んだりしていた。

もう、こういう勉強方法は、大学共通テストには通用しないのだろうか。受験勉強の傾向と対策も、また変わりゆくのだろうか。

令和元年5月17日付けで、教育再生実行会議から、「技術の進展に応じた教育の革新、新時代に対応した高等学校改革について（第十一次提言）」が公表された。この提言には、新時代へ向けた教育再生のために、「技術の進展に応じた教育の革新について」と「新しい時代に対応した高等学校改革について」の二つのテーマが設定されている(p. 2)。

技術の進展に応じた教育改革の項では、ICT、AI、AR、VR、IoTといった比較的なじみの深い用語に加えて、Society 5.0 (p. 1)、EBPM (Evidence-based Policymaking)(p. 3)、STEAM 教育 (Science, Technology, Engineering, Art, Mathematic)(p.6)、BYOD (Bring Your Own Device)(p. 15)といった、初めて聞くようなヨコモジの用語が、脚注付きで多用されている。たしかに技術の進展を教育の場で享受し、より効率よく、その質と量を高めていくことは重要な事である。しかし、揚げ足を取るようだけれど、たとえば、今まで、携帯やスマホの持ち込み禁止でやっきになっていた生活指導の場面なんかを考えると、「昨日まで神様だと言っていたけど、実は人間でした」



と言いだめた時代と似た感覚も少なからずあり、教える側の立場にいる者には、複雑な気持ちも正直あるのではないだろうか。

新時代に対応した高等学校改革の項では、「これからの高等学校は、Society 5.0 を生き抜くための力（①文章や情報を正確に読み解き、対話する力、②科学的に思考・吟味し活用する力、③価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力等）や生徒一人一人が能動的に学ぶ姿勢を共通的に身に付けさせるとともに、将来、世界を牽引する研究者や幅広い分野で新しい価値を提供できる人材となるための力を育むことが求められています。また、生徒が高い志をもって成長し、より良い社会の担い手となるよう、生徒の自己肯定感を育むことも求められます。」(p. 20)という提言が柱になっている。それに続いて、「これらの力は、これまで育まれてきたものとは全く異なる新しい力ではなく、高等学校教育が長年育成を目指してきたものです。これらの力は、時代の変化という「流行」の中で未来を切り拓いていくために必要な力であり、その基盤は、学校教育における「不易」たるものの中で育まれるものです。」(p. 20)と記している。よくわからないけど、「不易 = いつまでも変わることはないもの」を基盤として、「流行 = 新しく、変わりゆくことへの対応」をしていくということか。それから、この提言が報道された時に、割とクローズアップされていたのが、「Society 5.0 をたくましく生きるためには、文系・理系のどちらかに偏ることなく、バランスよく資質・能力を身に付けていくことが重要であり、例えば、教育理念に基づくことなく、大学入学者選抜等を過度に重視した文系・理系に分断されたコースの開設等は、生徒に真に必要な力を身に付けさせる観点からは、望ましい在り方とは言い難い。」(p. 22)という、高等学校の普通科の在り方に関する部分だった。大学入試を「過度」に意識した、という表現は、どうなんだろう。大学共通テストも変わりゆく。そして、そのために、高校の「受験指導」も変わりゆかなくてはならないだろう。それとも高校は、「大学入学者選抜等」をそんなに重視しなくていいのか。そもそも、高等教育機関への入り口は、初等中等教育機関の出口と繋がっていないといけないのではないだろうか。大学共通テストは、この提言にあるような高等学校改革と同じ方向を向いていると、解釈できるのだろうか。芭蕉が体得したという「不易流行」の意味を、今、じっくり考えたい。変わりゆく時代を生きる者達は、何をすべきなのだろうか。芭蕉は「不易」と「流行」は、「その本は一つなり」と書き残している。

今、勤務している短大は「変わらないものを、次世代に引き継ぐために、変わります」と、宣言している。なんだか、禅問答のようだけれど、変わらないものを維持するために、変わっていくということかと納得し、結構気に入っている。2019年3月の卒業パーティーで、卒業生達に、「この学校で身につけた変わらないものを大切に、そして、これからの長い人生の中で、それをより大きく育てて下さい」と挨拶した。そして、ガラにもなく、聖書から次の言葉をみつけて、朗読した。

#### Ecclesiastes Chap 1

1:4 One generation passeth away, and another generation cometh: but the earth abideth forever.

## 伝道の本 第1章 伝道者の言葉。

1:4 世は去り、世はきたる。しかし地は永遠に変わらない。

でも、「変わらないもの」って、ホントは何なんだ、というギモンもある。前出の「その基盤は、学校教育における不易たるものの中で育まれるもの」を読み返せば、学校教育は、まず「不易」が重要なんじゃないか、その基盤を身につけさせることぐらいは、しっかりやらなくてはいけないのではないか。永遠に変わらない地に、すっきりと立つ力を身につけさせることが、学校の役割ではないか。変わりゆく時代のありようは予想さえ困難だ。変わりゆく時代に、その都度対応できる「変わらないもの」を身につけさせるのだから…!

毎朝の高速通勤は、更埴ジャンクションで上信越道に乗り、長野東インターで降りる。そのまま北に向かって走り、千曲川にかかる村山橋という橋を渡る。職場の方向に向かって左前方を見ると、遠くに北アルプスが見える。右前方には、北信五岳と呼ばれている、戸隠山・飯綱山・黒姫山・妙高山・斑尾山が見える。その時、バックミラーには、菅平高原の山々や根子岳が見える。360度、山に囲まれているのだ。晴れた春の朝、くっきり・はっきりと目の前に現れる、白い雪をたたえた北アルプスと、堂々と迫り来る北信五岳を想像して欲しい。「もう今日はここで車を止めて、ずうっと山を眺めていたい」と思ったりする。

この村山橋は、全国的にも非常に珍しい「鉄道・道路供用橋」で、車道と並んで長野電鉄の電車が走っている。その鉄路に、都会でのオツトメを終えた東急電鉄の車両が走っている。長野のローカルな私鉄で、第二の人生を送っているのだ。たまに、箱根鉄道で一斉を風靡したロマンスカーなんか走ってくる。40年も昔、通学に使っていた東横線で走っていた銀色に赤い帯の入った四角い電車も走ってくる。当時、渋谷と桜木町の間を走っていた東急東横線の真ん中あたり、田園調布と多摩川を挟んだ新丸子という街に住んでいた。快速が止まらない小さな駅だった。村山橋の鉄路に復活した東横線の電車を見かけると、「アルバイト、電車で、横浜まで、帰るころは、午前零時 …」、ハマショーの『路地裏の少年』みたいな大学時代を熱く思い出す。浜田省吾さんは大学の先輩にあたる。しかし、時は流れて、年とるわけだな。そういえば、その歌の中にもちよっと登場する Bob Dylan は、“The Times They Are A Changin'”なんて唄ってもいたなあ。第二の人生を送っている東横線の車両を懐かしく見ながら、あらためて振り返れば、自分も、もうずいぶん変わり来たなあ、などと思う。「変わり来た」という日本語は少しおかしいか。英語で言うと、I have been changing. かなあ、I'm changing. かな。

定年退職までもう少し、老害にならないように気をつけて、のんびりと働かせてもらおう、などと不謹慎なことを考えていたら、2019年の4月から、「短期大学部長」などという仕事を仰せつかった。変わりゆく時代の中で、短期大学の今後の在り方に対処する課題は大きい。しかしまだ、何をしたらいいか良く分からない。ただ、変わりゆく時代を察知しながらも、「変わらないもの」って案外、「昔から積み重ねてきた地道なことじゃあないかなあ」、などと言いつけることが、自分に与えられた仕事の大きな部分を占めるのではないかと考えている。

## 参考文献

Amano, I. (2000). 'Admission policies in Japanese universities.' in *JLTA Journal No. 2: pp. 30 - 45*. <[https://doi.org/10.20622/jlta.3.0\\_30](https://doi.org/10.20622/jlta.3.0_30)>

教育再生実行会議. (2019). 「技術の進展に応じた教育の革新、新時代に対応した高等学校改革について（第十一次提言）」

文部科学省. 「大学入学者選抜の変遷について 資料 1-3」.

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo12/shiryo/\\_icsFiles/afieldfile/2012/11/05/1327537\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2012/11/05/1327537_3.pdf)

## 編集後記

中村洋一先生は本号の連載において、「変わらないものとは、昔から積み重ねてきた地道なことではないか」と結んでおられます。中村氏と私は大学院の同級生でしたが、彼は大学院入学時には、既に研究の方向性を決めており、その後も変わることなく、テストインナー筋に歩んでこられました。パソコンやら統計やら、何もわからない私は、いろいろと教えていただいたことを思い出します。私は今日、休日の研究室でjs-STARをウェブ上で使わせてもらっていますが、上越に在学当時、フロッピーディスクで配布されたSTARを使って統計処理を行い、アスタリスクがつくと、非常にうれしかったのをよく覚えています。学部生時代は英語学専攻で、意味不明な深層構造とか表層構造とか書いてある書籍を読んでいました。理論言語学は才能なしと見切りをつけ、英語教師になったものの、教育効果をどう測定するかなどについては無知でしたし、興味もありませんでしたので、統計処理ソフトとの出会いが人生を変えたと言っても過言ではないと思います。しかし、本当に人生を変えてくれたのは人との出会い、大学院の友人や恩師との出会いです。STARはその後も改良され、Rとも連携し、現在では効果量、検出力まで出してくれるjs-STARになっていますが、どんなに統計を論じて、指導方法や教材の優劣を論じて、教師と学習者の間に存在する敬意や信頼関係といった要因に行きついてしまうのが教育の不変なところではないかと思います。私は今、大学院時代に私に統計を教えてくださいました恩師の当時の年齢をはるかに超えてしまいましたが、「変わらないもの」の1つが上越時代に会った皆さまとの絆であると思っています。

(編集委員 H.I.)



---

2019年7月1日発行

発行者 上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子 (上越教育大学)

野地美幸 (上越教育大学)

飯島博之 (埼玉県立大学)

---